

人はなぜ踊るのか

Why Man Dance ?

1K09B117

指導教員 主査 杉山千鶴 先生

鈴木 優香

副査 友添秀則 先生

【本研究の目的と方法】

本研究では、「なぜ人は踊るのか」を明らかにする。

答えは、楽しいから、気持ちが良いからなどすぐに思いつくようなものを期待してはいない。なぜならそこには、どうしてそう感じるのか、というさらなる疑問が隠されているからである。踊る理由として挙げたものが、それを達成するためには、他の行為では代替できず、踊ることでこそ、それを可能にする、と証明できると考えている。

「なぜ人は踊るのか」について考えるにあたり、舞踊と人とのさまざまな関わり方を見ていく。本論では、以下の3つの視点を設定する。

- ①コミュニケーションとしての舞踊・ダンス
- ②感情表現としての舞踊・ダンス
- ③歴史のなかの舞踊・ダンス

①と②は人間が舞踊をどのように受け入れ、活用しているのかという、人間にとっての舞踊・ダンスである。①は神経科学・認知心理学・コミュニケーション論の、②は身体心理学・リズム論・心理療法の各視点から考察する。③は人間とともに社会に存在し社会の中で生きてきた舞踊・ダンスである。これについては感性や、政治・社会との関連の各視点から考察する。以上の考察についてはそれぞれの各領域に関する文献や論考を用い、舞踊の持つ特性を理解する。以上より人が踊る理由の探究を試みる。

【①コミュニケーションとしてのダンス】

言語を持たなかった時代に、ダンスは、表象的コミュニケーションの形で始まった。「模倣」することによって同じ動作を同じものを指す動作として共有できる。模倣してとられていたコミュニケーションが、言語として発声されるようになったのである。

音楽を聴いた時に、つい身体が動くという場合、高次の聴覚野を介在せずに、無意識に同調していることになるため、本能で行っている。

舞踊の要因が決定される際、文化的価値、政治的、宗教的や経済的など様々なものが絡んでくる。それらを含んだ舞踊は、なんらかのメッセージを持つ。このメッセージを伝わりやすいように工夫して踊りの振りを考える。観客は、踊りを観て、なんらかのメッセージを受け取る。そこで得られる反応が再び要因となる。これが舞踊のコミュニケーション・モデルによって示されている。

【②感情表現としてのダンス】

バンドゥーラの三者相互作用説をもとに、動きと心は相互に作用しているとする。動きによって、心に変化をもたらされるため、動きを制御すれば、気分や感覚も変わる可能性がある。身体にはちょうど良いリズムがある。しかし、外界からのリズム刺激に対し、内部は敏感に反応してしまう。この自分でちょうど良いと感じるリズムとは異なっても、50%以内のペースの変化であれば、快感情が得られる。快感情を得られるリズムを人と共有することで、お互いに身体的に共感できる。したがって、リズムが必ず伴うダンスでは、他者と感情の共有ができる。

自分にとっての脅威や緊張は、原因が解決しても、筋記憶や感覚の記憶によって、身体に蓄積される。これを、ダンスセラピーを通して、筋肉や感覚的に身体に蓄積された緊張を解きほぐしていく。人は、ダンスを用いて感情を表現したり、整理したりしているのである。

【③歴史のなかのダンス】

涙を流す対象や、捉え方は時代によって変化してきた。では、ダンスにおける感情表現の部分のあり方も変化してきたのか。ダンスは、リズムの共有により、感情の共有がなされる。リズムを刻む音楽は時代によって変化するが、音楽以外にもリズムは刻まれている。たとえ、音楽やダンスに時代に合わせた変化がみられても、リズムの共有という根本的な部分に変化はない。すなわち、舞踊の仕様が歴史と共に変わっても、感情の共有という面では、いつの時代もその役割を持っているのである。

フランスでダンスは、中世において、民衆を統制するために用いられ、プロパガンダの道具にもされており、国の公的な役割を担っていた。アメリカでは、第二次世界大戦後の外交に用いられ、ドイツでは、ナチスの政権下中だけでも、利用されたり、危険視されたりと、国家に振り回されていた。

【結論】

「人はなぜ踊るのか」。試みではあるが、本研究は以下をその答えとしたい。

1. 言葉では伝えられないものを伝えるために踊る
2. 無意識のうちに音楽に同調して本能で踊る
3. リズムの共有による感情の共有が心地よいため踊る
4. 心身を緊張や脅威から解き放つために踊る
5. 時代に求められて踊る